

大学からの中途退学についての文献レビュー：日本の雑誌論文を中心に

<背景>

- ・ 日本の大学生の中途退学
 - － 約 7 万 9 千人（全学生約 300 万人に対して 2.65%）※ [1 人の迷い・決断・届け出] × 7 万 9 千パターン
- ・ 中途退学後の労働・生活条件
 - － 非正規雇用が多い、収入が少ない（労働政策研究・研修機構（2015）『大学等中退者の就労と意識に関する研究』）

<アメリカ>

- ・ 研究・実践の知見が共有できる
 - － 例：Center for the Study of College Student Retention の文献リストに 1,700 本以上
(<http://www.cscsr.org/References.html>)
 - － 中途退学の説明モデルがある
(丸山文裕 (1984). 大学退学に対する大学環境要因の影響力の分析 教育社会学研究, 39, 140-153.)
 - ・ 複雑な状況を理解し、知見を共有・蓄積することができる
(参考：「モデルとは何か」(小野里雅彦先生/北海道大学大学院)
<http://dse.ssi.ist.hokudai.ac.jp/~onosato/lectures/DSE19/H19-Model.pdf>)

<日本>

- ・ 研究・実践の知見が共有されていない
 - － 事例研究があるものの、それぞれがつながっていない
- ・ そこで本発表では [集計方法] と [主要文献] を報告
 - － [集計方法] それぞれの文献内で用いられているものを整理
 - 概要を把握
 - ・ 経年変化：入学年度×退学率（4 年以内）、基本的な集計
 - ・ 休学・退学割合の変化：上位/下位が、ある年度で逆転
 - ・ 入学年度別：入学後経過年数×退学率、入学年度による違い
 - ・ 入試区分別
 - 個人に着目
 - ・ 取得単位：[0-4] [5-8] … [21-24] など区分を設けて、区分ごとに集計
 - ・ 主な理由：どの理由が多いか、感覚との違いがあるか
 - ・ 個人属性：授業理解・入学目的・友人関係・勉強好き嫌い・積極的/消極的、
[項目別] と [項目組み合わせ] で集計
 - ・ 心理調査：診断ごとの集計、特徴的な回答項目
 - ・ 相談有無：カウンセリングの利用状況ごとに集計
 - ・ 実施効果：特徴的な取り組みを始めた年度の前年で値の変化を見る

<先行研究を把握するのに役立つ主な文献（雑誌論文が中心）>

- ・ 丸山文裕 (1984). 大学退学に対する大学環境要因の影響力の分析 教育社会学研究, 39, 140-153.
 - ※ アメリカの先行研究レビュー、米国モデル応用して日本を検討
- ・ 窪内節子 (2009). 大学退学とその防止に繋がるこれからの新入生への学生相談的アプローチのあり方 山梨英和大学紀要, 8, 9-17.
 - ※ 日本の先行研究レビュー、心理学の知見で学生相談を検討
- ・ 姉川恭子 (2014). 大学の学習・生活環境と退学率の要因分析 経済論究, 149, 1-16.
 - ※ 各種調査を整理：大学の實力（読売新聞）、学校法人基本調査（私学事業団）、学校基本調査（文部科学省）
「公開データ×先行研究で指摘の要因」で検討
- ・ Berger, J. B., Ramirez, G. B., & Lyonsm, S. (2012). Past to present: A historical look at retention. In A. Seidman(Ed.) *College student retention: Formula for student success second edition*. Lanham, ML: Rowman & Littlefield Publishing Group. pp.7-34.
 - ※ アメリカの先行研究レビュー

<謝辞>

本発表は平成 27 年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（奨励研究）「データに基づく大学生の中途退学防止策（IR）のモデル構築：日米の制度差に着目して」（課題番号：15H00090、研究代表者：橋本智也）の助成を受けたものです。